

連載

社会教育施設について考える

地域博物館における天文教育

～地域で天文分野が機能するための取り組みから～

鷹 宏道（平塚市博物館）、生涯学習施設支援 WG

平塚市博物館は、自他ともに認める地域博物館の先駆けとして活動する博物館です。そのような地域を扱う博物館で天文がどのような位置づけをされてきて、どのような活動が行われてきたのかを、平塚市博物館の特徴とともに、開館当初から館に勤める鷹宏道さんに寄稿していただきました。（塚田・平塚市博）

1. はじめに

日本各地に点在する地域の社会教育、生涯学習施設は天文教育においてもそれなりに存在感のある立ち位置を持っていますが、その実態となるとなかなか明瞭に描きにくいのではないのでしょうか。私自身、40年間この世界にいて、学校教育のように、施設の形態や対象、携わる人間の職務内容、担当者像をはっきり表現しづらいのが現状です。ここでは、前2回の大きな都市の科学館と対照的な地方中小都市の施設として、私が勤めてきた平塚市博物館を例に、全国各地に存在する地方の社会教育施設とその運営を考える際のサンプルにさせていただこうと思います。

まず、平塚という一地方都市の地域性についてふれておきます。次に博物館が時代の変化に伴い、生涯学習施設としてどのような対応をしてきたのか、述べてみたいと思います。

2. 地域博物館と天文

神奈川県相模湾岸の中ほどに位置する中規模都市、平塚市に博物館が開設されたのは、1976年5月のことです。平塚市博物館は、小規模ながらも総合博物館ということで、人

文系の考古、歴史、民俗、自然系の地質、生物、天文の分野を擁し、当時、神奈川県では3番目となるプラネタリウムが設置されました。博物館の設置理由は、高度経済成長に伴う開発により失われつつあった遺跡や文化財、自然環境の破壊から郷土の自然と文化を記録し遺していくことにありました。そこで平塚を取り巻く自然環境と文化圏をフィールドとし、当時としては珍しい地域住民を主な利用者として意識した「地域博物館」という構想



図1 平塚市博物館外観

のもとに活動を始めました。その最大の目的は、地域をそこに暮らす住民と様々な視点で調べ、資料を集め保存し、明確な地域像を作る拠点として機能することです。

そのような地域博物館への天文分野、プラネタリウムの併設は、何を意識してのことだったのでしょうか。1970年代当時は、地域博物館の守備範囲に天文という分野が意識されることはありません。地域からの要請というより当時全国的に設置されていた科学教育センターの機能を学校教育サイドから求められ、

後から博物館建設構想に組み入れられたものになります。

では、天文を担当する学芸員はどう採用されたのか。博物館は学芸員がいてあたりまえの世界ですが、博物館学は当時、文系、教育系学部の世界のもので理系学部にはそれほど認知されていなかったように思います。他の分野担当の学芸員は、人文系であれば史学や国文学の専攻者、自然系であれば地質学、林学の専攻者で、大学に博物館学の講座があったためそれを受講し、学芸員資格をすでに取得した人が採用されました。

一方、博物館準備室では天文分野は他の分野と同じ学芸員資格を持つ者の採用が難しいこともあって、天文担当は学芸員による運営とは別枠で、という意見もある中、同じ学芸員として処遇するよう人事に働きかけ、採用時には資格の有無は問わない、ということにしてもらいました。

プラネタリウムの運営があるため2名配置されましたが、実は二人とも理学部ではありませんでしたが、物理と化学専攻で天文専攻でこそあれ、天文部でのアマチュア経験のみ。しかも学芸員資格は持っておらず、あとから国家試験で取得しました。今ほど天文学を学べる大学、学部も少なく、なんとなく泥縄で決まった、といったところでしょうか。

3. 学芸員職とその仕事

博物館は平塚市が建設し、教育委員会が運営するという、当時としてはあたりまえの公設公営の施設です。市の博物館設置条例で学芸員の配置がうたわれました。学芸員は博物館の専門職として、博物館法とその設置基準に定義づけられており、当時の文部省の登録博物館の認定要件のひとつでした。

ただ、市町村のレベルでは、学芸員のような職種を行政の専門職として位置付けることは少なく、数年で異動する一般事務職が学芸

員として配置されるか、学校の教員を指導主事などの立場で配置する、といったことが多くなされていました。地方の中小自治体が専門家を集めた組織を作り、専門職として人事発令をすることはまずなかった、といえます。平塚市の場合も人事からはかなり抵抗があったものの、開館時に注目を浴びた勢いという文化行政の担い手としての期待などもあってか（組合の力も借りた）、開館後2年ほど経って事務職が兼ねる形ですが学芸員としての発令を認めてもらうことができました。

その後40年を経て、いまだに事務職ではあるものの、人事は学芸員として別枠で採用し、定員を確保し続けてくれています。その間、市の機構改革が数回あり、人事や市の将来計画を担当する部署では学芸員を任期付きの職種に位置づけする調査や、社会教育施設の運営を外委託する研究などもされていたようで、直属の上司から意見を求められ、反対意見書を提出したこともあります。

博物館事業の主たるものは特別展開催事業です。それは学芸員の調査活動や資料収集活動の成果発表の舞台であり、平塚市博物館では年3回企画されます。特別展は学芸員の最大の関心事、といえます。各分野の担当にほぼ2年毎に回ってくる特別展は、どのようなテーマで何を展示するかに始まり、関連行事の企画、図録などの出版物の執筆・構成が主な準備作業としてあります。

特別展の企画は、展示する資料が持つ力を表に出すか、地域の調査活動の成果を主に、収集資料をその成果物として展示するか、などによってテーマが異なります。また、周辺地域で積み重ねてきた調査結果や資料の所在などは地域の博物館との連携、学芸員同士の情報交換により共有されており、展示開催へのたくさんのヒントが得られます。

その枠組みの中に天文も組み込まれているわけですが、特別展示室を埋める資料、それ

も実物資料は他の分野と違い皆無に近く、どんなテーマで、どんな資料を使って展示を構成するか、他の分野のように地域情報が使えるわけでもなく、常に頭の痛いところです。

表 1 天文担当の特別展

1978年	星座と星たち
1986年	ハレーすい星展
1993年	太陽活動をさぐる
1997年	平塚の星空
2000年	星の地図・星の住所
2003年	火星大接近2003
2006年	里に降りた星たち
2009年	ガリレオから400年
2011年	星々のみちびき ～大雄山参道二十八宿灯～
2013年	天の川銀河へようこそ
2014年	ぼくたちはひとりぼっち？ 地球の外に生命を探して
2016年	知られざる平塚のロケット開発



図 2 特別展図録

それでも今までに 12 回の特別展を企画し、プラネタリウムとともに地域における天文分野の存在をなんとか認識され生きながらえています。

4. プラネタリウムの存在

天文分野を博物館の他の分野と比べると、地域的な資料の有無、学芸員同士の情報共有機会能力、人材育成を行う大学の数、地域住民の興味や関心の高さ、今日的な意味での社会性、あらゆる点で圧倒的に小規模です。それでも生きながらえ、それなりに注目されているのは、時々大きな話題となる天文学という宇宙を対象にした分野を持っているという

一種の優越感と、その表現手段としてのプラネタリウムという、地方にとっては他に類を見ない教養娯楽・学習施設が存在していることです。国内には大小あわせて 330 ものプラネタリウム施設が稼働しており、地方の中規模都市なら必ずあって不思議はないほどです。

もちろんその運営方針は平塚と全く同じではないにせよ地域住民に開かれた学びの場となっているのだらうと思います。特に太陽系から深宇宙までのデータベースがセットされたデジタルプラネタリウムは、シームレスに 138 億光年の時空間を行き来できます。また、2006 年頃から始まった、フルドーム映像のプラネタリウム番組、とりわけ、KAGAYA 氏の「銀河鉄道の夜」、上坂浩光氏の「HAYABUSA BACK TO THE EARTH」は、星空の話を聞くと、というプラネタリウムの印象を変えるきっかけになりました。ある意味社会現象となったはやぶさの帰還の際には、幼児から年配者までが、小惑星イトカワの探査、サンプルリターン計画とその行程を、映像を見て知ることとなりました。プラネタリウムは自分に関心を持った話題を、わかりやすく伝えてくれるという期待感を持ってもらえています。

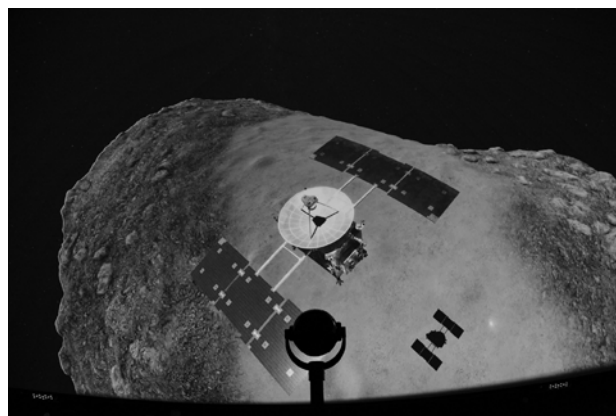


図 3 プラネタリウムとドーム映像

5. 教育普及活動の変遷

地域という言葉を多用していますが、平塚市博物館は、平塚市という市域や平塚市民の

みを意識して事業を実施しているのではありません。平塚という地域がよって立つ歴史的、地理的な要因でつながる広がりをもった地域＝相模川流域を意識しています。したがって博物館活動には市外から参加する人たちも多く、博物館を拠点にした外部の調査研究グループも活動しています。

天文部門では天体観察会という、天文現象の観察や観測をやりたい人たち向けの年間会員制行事が 30 年ほど継続されています。初期の頃は中高校生主体だった会ですが、いまや中高年主体に様変わりしています。学生の頃から延々と継続している会員もかなりいます。彼らのなかには、自主的に研究会や勉強会を作る、観測研究を指向する会員もいます。このような年間会員制行事（ワーキンググループ：WG）が活発に活動しているのも、平塚市博物館の大きな特徴です。

また、20 年ほど前から博物館では、さまざまな WG 活動の発表の場を設けています。博物館文化祭という名称で、2 週間程度の期間、展示、活動報告会、実演などを一堂に会して行う機会を作っています。いくつかの WG は自主的に地域を歩き、調査を行い、資料を集め、分析・考察する、というプロセスを展開し、それらをもとに見事な展示、発表に結びつけています。天文分野はなかなかその域に達する成果は出せてはいませんが、展示では映像を多用して見せる工夫がうまいと評価されます。研究活動も活発化しており、数年を経ずして他の分野に引けを取らない発表ができるようになるでしょう。

こうした事業は近年、いわゆる協働とかコラボレーションといった行政視点からの言葉で括られがちですが、彼らが活動する目的はもうすこし自律的です。自分たちの手で、自分たちの住む地域の成り立ち、人々のくらしを幅広く集めた情報をもとに再構築しよう、そしてそれを地域で共有しよう、という意識を感じています。

天文分野の活動もその中であって、ある程度認知された立ち位置を得ているように思います。それは発表会で科学的な知識や興味のない人たちには難しいなあ、と思うような内容であっても発表会の参加者は少しでも理解しようとして、聞き入り、質問をしてくれるからです。そこに自分たちが共有している一種のコミュニティができてるように見受けられます。

学芸員はこのような地域住民の活動の中にあって、どのような立ち位置で存在感を出しているのでしょうか。一番大きな点は、ややもすると自分たちの活動や成果をひいき目で評価したがる人たちに、科学的な視点で見ることの意義、公正な物差しのあてかたをトレーニングしてくれる存在なのです。

幸いにして平塚市博物館の天文分野にも有能な若手学芸員が 2 名配属されました。二人とも早速にパワーを発揮し始め、観察会の人たちも快く迎え入れてくれました。彼ら地域住民にとっても自分たちの興味関心に的確に答えてくれ、活動を理解し、さらに新しい知見を与え、視野を広げてくれるガイド役を得たことに喜びを持っています。

6. おわりに

冒頭にも述べた通り、生涯学習事業には全ての地域にあてはめられる標準的なモデルは存在していないと思います。それぞれの施設が地域性と施設の運営形態を見すえながら、存在意義を認められる解を見つけだす必要があります。さらに、施設が地域住民のさまざまな興味関心を共有する、ゆるやかな共同体として動いていく場、としての機能を果たしていることが評価される、そんな施設が増えることを期待しています。